

帯で広がる ぜいたくな読書体験

法学部教授 加藤 詔士

「つむ見慣れた本のカラー
その魅力は帯にあり」



1. 帯の活用

(一)

帯をつけ替えたことで販売が急伸。そんなことが話題になっている。最近では、東直子の短編小説集『とりつくしま』（筑摩書房）がそうであって、文庫本の新帯に「大好きな人に今すぐ会いたくなる本 No.1!」というコピーにつけ替えたら、3カ月で10万部増刷することになった。

外山滋比古『思考の整理学』（ちくま文庫）の場合も、「東大・京大で1番読まれた本」とか「もっと若い時に読んでいれば・・・」とかいうキャッチコピーを帯に刷りこんだら、販売拡大のきっかけになった。前者は高学歴志向の若者に訴えかけたから、後者は中高年の心に刺さるメッセージとなったからにちがいない。

七月隆文『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』（宝島社文庫）も、売上が劇的に変わった。「『泣ける』 読書メーターで大反響!!」「電車で読んだのが間違っていた・・・」など、「読者からの人気ぶり」と感想を入れることで、誰もが共感できる作品であることを示したことがブレイクにつながったようである。

帯の工夫だけで売上が劇的にあがったという実績があるのだから、それをビジネスモデルにすれば販売成績を高める展望がひらける。ネットには「思わず手に取りたくなる“本の帯”キャッチコピー集」なるものまでまとめられており、経営戦略としてこれを活用しない手はないであろう。

帯を変えたら販売拡大したということは、帯は本の魅力を引き出すことができるし、予想もしない情報発信力があるということになる。そうであれば、図書館人が帯に無頓着でいることなどとうてい考えられない。帯を破棄するなどもつてのほかである。軽視するどころか、読み手を誘惑するような帯の活用法に心を砕き、創意工夫をこらした読書環境を演出することを願わずにはいられない。

(二)

本の帯。正式には帯紙。腰帯、腰巻、フンドシという俗語もある。「広辞苑」（第6版）には「内容紹介などを印刷して、書籍の表紙や外箱の下方に帯状に巻いた紙」とあるが、内容や特色の紹介だけでなく、短評、推薦文などが書かれる場合もある。キャッチコピーを載せて本の魅力を宣伝し、読者の購買意欲を刺激する。少ないス



東直子『とりつくしま』（筑摩書房）



ペースで本を効果的にPRできる。とくにネットのなかった時代には大きな判断材料の一つになった。

帯は日本独特の出版技術である。欧米ではごくまれにしか見られないのに、日本で帯文化がこれほど発達したのはなぜなのか。それは出版物の委託販売制との関連で、書店での在庫期間が短いことに起因しているようだ。返本するまでに「これで悩殺して、売れ行きを早めよう」という発想である。

その帯の起源については諸説あるが、早くも大正時代、阿部次郎『三太郎の日記』（東雲堂書店、大正3）やE.トルラー（村山知義訳）『燕の書』（長隆舎書店、大正14）などに簡単ながら帯がつけられた。これが一般的になるのは昭和時代に入ってからであって、「とくに岩波文庫が分類用の色帯をつけて学生層にアピールした」。緑は現代日本文学、白は法律・政治・経済、赤は東洋・外国文学などという5色の帯の色分けである。

戦争中は紙不足から帯なしが多くなった。帯があっても戦時色の濃い文句が目立ち、美的な要素や洗練度は二の次になる。

戦後間もなく復活し、タイトルと装幀と帯の相乗効果をねらった本造りが基本戦略になる。帯の役割を再認識させようと、「日本腰巻文学大賞」まで創設される（1973年～1980年）ということもあった。今日、帯は造本に必須の要素である。とくに新刊書に欠かせない意匠になった。『オビから読むブックガイド』（勉誠出版、2016）と題する本まで登場している。文芸本 150冊の帯の歴史、値段、キャッチコピー、デザインなどの視点から日本文学をひもといた読書案内書である。読者への案内として帯がつくが、その帯の側面から日本文学を整理した注目作である。

2. 帯の魅力

帯は、装幀と同じように、その身を飾る衣装のようなものである。本の風貌まで支配する。文章だけでなく、活字、配色、レイアウトとも呼応しあいさまざまな表情をして読書人を誘う。カバーとともに、本の顔としてその本を主張している。昭和30年代後半からの高度成長のころ、本の帯にも多色刷りの、ひどく着飾ったきらめきの帯が目立ったことがあったが、一見控えめであるけれどもおだやかな主張があるのがいい。近年では、帯のサイズ、形、レイアウトデザインなどにも工夫がこらされ、種々の仕様がみられる。

帯の一文で本の売上が左右されることになるだけに、帯は編集人（出版人）が頭をひねって端正に仕つらえる。思わず手がのびて抜きとってみたいくなるような仕掛けを考えだす。執筆者もまた主題と副題を補って本のメッセージを的確に伝える一文を捻りだす



竹内勝巳
『オビから読むブックガイド』
（勉誠出版、2016）

など、仕上がるまでに並々ならぬ努力が払われている。本の持ち味や特色を簡潔・的確に圧縮した究極の字句が選り出され、練りに練った魅力あふれる一文で飾られるだけに、本は帯も装幀もついたら、そのまま、刊行されたときの原装のままであることこそ願わしい。

文芸本などの場合、タイトルだけで何の本かが分かりづらいので、帯は生命線。判断材料が少ないと本選びに失敗しかねない。読者がひと目みて本の内容を読みとり、ついつい手にとってしまうような、本の販促商材なのである。受賞、映画化、テレビ化などという付加価値が加われば、帯は素早くかけ替えられる。造本や装幀とちがって簡単にかき替えられる。それだけに、帯は重要な書誌情報が含まれている。

帯の素性がそうであるなら、第一に書評や図書紹介では、本の内容についてだけでなく、帯や装幀も含めた、文字どおり本の総体について取りあつかわれるのが望ましい。本体そのものを書物と考える西洋の書物観からすれば、帯は函やカバーなどとともにも付属物であるけれども、帯は本の顔なのである。タイトル、内容、装幀とともに一体化して本の総体をなすはずである。

日外アンシエーツ（株）という知的情報サービス会社など、帯もっているこの価値、この情報力に着目した出版活動をしている。『日本研究』図書：世界の中の日本』（2005）などがそうであって、たとえばH.ダイアー（平野勇夫訳）『大日本』（実業之日本社、1999）の紹介文は、この本の帯にある文章がそっくりそのまま転載されているのである。これなど、まさに帯はその本の特色、手にとって中をのぞいてみたい気になるような、うたい文句がちりばめられているということの象徴である。

第二に、図書館の書架に収めるときは、帯をつけたまま配架されることが望まれる。帯付きで配架するまでに保護用フィルムシートで装備するなどの工程が増えるからなのか、そこまでする図書館は思いのほかに少ない。帯もカバーもはぎ取られて素裸では、実に無残で貧相な姿になる。誘われて思わず手にとって中をのぞいてみたくなることなど、ありえない。見返しに帯を貼りつけるところがあるが、そんな工夫でもして破棄せぬようにできないだろうか。せめて特定の図書館だけでいい。図書館情報学などの授業を開設している大学の図書館だけでも、帯を破棄しないことを願わずにはいられない。

国会図書館では「造本・装幀文化の保存と伝承」という方針のもと、造本・装幀コンクールの出品図書についてだけだが、2013年度から、函やケース、カバー、帯などを取りはずさず原装のまま保存されることになった。保存されて未来に伝承されることは誠に喜ばしい。

3. 帯の底力

帯にこだわりをもつのは出版人や図書館人に限らない。執筆者もまかせきりではなく、とうぜん少しは注文をつける。帯は装幀とともに衣装のようなものであり、衣装がピタリときまれば読書人を魅惑する。安手の服を着ていては、目を射ることなどないのだから、無関心ではいられない。

帯にこだわったといえば、三島由紀夫（1925-1970）が知られている。三島は、装幀とともに帯にも相当気をくばっていた。版が変わるごとに瀟洒で品格を感じさせるような衣装を着せたいと心を砕いたはずである。そうであれば、三島の著作文献研究には帯についての考察も重要な対象になりうる。大場政志『三島由紀夫 古本屋の書誌学』（ワイズ出版、1998）は、三島のそうした帯への執着ぶりに着目した見事な著作研究である。

三島の著作文献研究というと、『定本三島由紀夫書誌』（薔薇十字社）を挙げるむきがある。「三島の著作を集める者に、唯一の道しるべであった」という評価がずっと定着しているけれども、帯への関心はまったくといっていいほどみられない。除外されてしまっている。それとは



大場政志
『三島由紀夫 古本屋の書誌学』
（ワイズ出版、1998）

対照的に、『三島由紀夫 古本屋の書誌学』には三島の本の各版の表紙ないし表紙カバーの写真が帯を含めて収録されているので、どんな宣伝文句で売り出されたかを瞬時に知ることができる。初版、第二版と版が変われば、帯もとうぜん変わるので、謳い文句がどのように変わったのか、あるいは世間の関心がどう変わったかということも、帯から知ることができる。帯はとても重要な書誌情報を含むのである。

帯情報は古書目録にも記されてはいるが、帯の有無についてだけであって、帯の内容まで知ることはできない。帯付完本の場合は高値を呼ぶのだが、『目録』からは帯の内容まで知ることはできないのだから、手にとらずにはいられないような衝動はおきない。

4. 帯に魅せられて

(一)

帯は、本の魅力や情報を伝えることで、購買意欲を高める重要な販促商材であるが、その一方、帯づくりを体験させることで本への興味を抱かせ読書の促進につながることもできる。読書を促進し子どもの豊かな感性を育てるという点から、いま帯をめぐる取り組みが少しずつだが広まりをみせている。

児童書の帯を小学生がデザインするコンクールを開いて、デザインの調和具合やキャッチコピーの巧みさを競わせる取り組みがある。小学校3年国語科では「友だちが読みたくなるような本の帯をつくろう」という単元があって、自分の読みを生かした帯を工夫して作ったり、友だちの帯からいろいろな感じ方の違いを知ったりして、読書の楽しさを広げる学習活動なのである。

中学校国語の授業にも帯作りが採り入れられている。好きな本を1冊選び、思わず手に取りたくなるような帯作りをさせる。自分で魅惑的なキャッチコピーを考え、絵と文字を組み合わせた作品を完成させるという活動である。その帯を地元の書店に売りこみ、優秀作品を実際に本に巻いて店頭に並べてもらったら、売上进行きという報告もある。

大学が公共図書館と連携した「本の帯コンクール」を開催することもおこなわれている。子どもの読書促進のため、本の帯作りをチャレンジさせるが、そのさい子どもが自分の思いを表現することを大学生が個別に支援するという企画である。

(二)

大学図書館の場合、「本の帯創作コンクール」でも企画すれば、従来なら本を読まぬ学生にも読書を広めるきっかけになるかもしれない。帯作りは書物をめぐる知的会話という面があるのだから、もっと広められることが期待される。

すでに「本の紹介カード」を作らせるとか、図書館で借りだした本を記録し自身の読書履歴を見える化しようとする「読書通帳」作りとか、本を知り人を知る書評ゲームといわれる「ビブリアバトル」などが広まっているけれども、この「本の帯創作コンクール」はもっとぜいたくな読書体験になるであろう。まず本へ興味を抱かせて手にとらせる、その本を考えながら読ませる、読んだあとに究極のひと言を考えさせる。究極のひと言に加えて、絵柄、レイアウトデザイン、色合いについても中身を引き立たせようと配慮し、手にとらずにはおられないような創意工夫をさせる。そんなことをして楽しむ知的な遊びなのであるから、学生の読書離れ、活字離れに立ち向かうきっかけになるかもしれない。

このような体験でもして運よく読書志向を身につけた学生は、知の世界に遊ぶ愉悦を味わい本のある生活を楽しむにちがいない。

- 【参考文献】
- 紀田順一郎『本の環境学』出版ニュース社、1975。
 - 紀田順一郎『読書人の周辺』実業之日本社、1979。
 - 『本の装釘・用の美』沖積舎、1986。
 - 大場政志『三島由紀夫 古本屋の書誌学』ワイズ出版、1998。
 - 竹内勝巳『オビから読むブックガイド』勉誠出版、2016。